

ドイツにおける 日本研究及び日本関係書誌

高木 浩子

- | | |
|------------------|-----------------|
| 1. はじめに | (2) 学会及び研究団体 |
| 2. 歴史的背景 | 5. 問題点 |
| 3. 80年代以降の動き | 6. 日本関係資料 |
| 4. データから見た日本学の現状 | (1) ドイツ語資料の書誌 |
| (1) 大学 | (2) 日本関係資料の所蔵状況 |

1. はじめに

近年のドイツにおける日本語学習者及び日本研究者の増加には目覚ましいものがある。おりしも、1990年のフランクフルト書籍市のテーマは「日本」で当館からも古典資料が多数出品され多くの人の関心を呼んだと聞く^①。研究機関としても1987年にはベルリンの旧日本大使館の跡に日独センターが設けられた。また1988年には東京にドイツ日本研究所が設けられ、同研究所は90年には、ケンペル来日300周年を記念して、日本各地で「ケンペル展」を開催した^②。こういった状況に対応するように、最近あいついで、「ドイツにおける日本研究」に関する資料及び書誌が刊行されたので、それを紹介しつつ、現在のドイツにおける日本研究の概要を紹介したい。

2. 歴史的背景

ドイツにおける日本紹介の歴史は古く、1649年にはキリスト教の宣教師の見聞をもとにベルンハルト・ファレン (Bernhard Varen) が「日本伝聞記」(Descriptio Regni Japoniae) を編集出版、1727年には1690年から1692年まで長崎に

医師として滞在したエンゲルベルト・ケンペル (Engelbert Kaempfer) が「日本誌」(The History of Japan) をついで、1832年には同じく長崎に1823年から1829年まで医師として滞在したフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (Philipp Franz von Siebold) が「日本」(Nippon: Archiv zur Beschreibung von Japan)、1881年にはヨハン・ユストゥス・ライン (Johann Justus Rein) が「日本一紀行と研究」(Japan nach Reisen und Studien) を出版した。

明治時代になると、多数のドイツ人が政府のお雇い教師あるいは技師として来日^③、彼らは新生日本に西欧の知識を伝える一方で、日本研究を行い、日本に関する多数の著作を残した。1873年には在日ドイツ人によって東京にドイツ東洋文化研究協会 (Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens = OAG) が創設され、その機関誌 ("Nachrichten" "Mitteilungen"^④) には日本の言語及び文学に関する研究論文が寄せられた。また、1874年から1881年まで教師として日本に滞在、1877年に帰国した言語学者のルドルフ・ランゲ (Rudolf Lange) はドイツで最初の日本語教育を

ベルリン大学の東洋語研究室 (Seminar für Orientalische Sprachen) ではじめ、東京大学で25年間ドイツ文学とドイツ哲学を教え1914年に帰国したカール・フローレンツ (Karl Florenz) はハンブルグ大学の植民研究所 (Kolonialinstitut) で日本研究を開始した。この後、ベルリンには1926年に日本研究所が設置され、1931年には、ハンブルグ、ベルリンに次いで3番目の日本学講座がライプチヒ大学に設けられたほか、1939年には、ウィーン大学にも日本研究所が設置された。しかし、戦前の日本学の対象は殆ど言語、宗教、歴史、古典文学に限られていた。

第2次大戦の後、ドイツの日本研究所は閉鎖され、大学における日本研究も一時、後退した。しかし、1947年にはベルリン大学 (フンボルト) で日本学の講座が再開され、1956年にはミュンヘン大学、1957年にはハンブルグ大学で講座が開かれ、1959年には、ボン大学にベルリンの東洋学研究所が移された。60年代には、ボーフム大学、ベルリン自由大学、ボン大学日本学ゼミ、フランクフルト大学、チュービンゲン大学、ウィーン大学、ヴェルツブルグ大学、チューリッヒ大学、70年代には、フライブルグ大学、ケルン大学、マールブルグ大学に日本学の講座が開設された。60年代には、従来の人文科学中心の日本研究に対して「茶室日本学」という批判が出されたが、その後の日本経済の発展もあって、日本の政治、経済、社会に対する関心が高まり、ベルリン、ボン、ボーフム等ではこの分野の研究も充実してきている。

3. 80年代以降の動き

80年代になると、ゲッチンゲン大学、

ハイデルベルク大学、トリアー大学、デュッセルドルフ大学、エアランゲン大学、デュイスブルグ大学に日本学講座が開設されたほか、ブレーメン大学やレーゲンスブルグ大学でも講座開設の準備が行われている。このような日本学もしくは日本語講座を設ける大学の急増で、1984年から1989年までのわずか5年間に日本学の学生数は平均で2倍に増え、西ドイツだけで現在4000人を越える学生が日本語を勉強しているということである。この他、成人学校や高等学校で日本語を学ぶ学習者もいれると、総数は8000人を越えるという^⑤。

現代のドイツにおける日本研究に関する資料としては、これまでは、国際交流基金が1985年に出した "Japanese studies in Europe"^⑥及び1987年に出したその翻訳版「ヨーロッパにおける日本研究」^⑦の中のドイツの項が唯一まとまったものであったが、その後の日本研究の動きを含めた本格的資料「ドイツ語圏の大学の日本学」^⑧"Japanologie an deutschsprachigen Universitäten"^⑧がチュービンゲン大学のクラウス・クラフト教授 (Kraus Kracht) によって1990年秋に出版された。ここでは、その内容を紹介する形で、ドイツにおける日本研究の現状を見てみたい。同書は、第1部で、現代のドイツの日本学の現状及び抱えている問題点について述べ、第2部で、日本学講座を持つドイツ国内の18大学及びウィーン大学、チューリッヒ大学に講座の沿革、スタッフ、学生、論文及び出版物、所蔵資料等について詳細な照会を行った結果を紹介、第3部で、現在の研究者の一覧と文献目録を載せている。

4. データから見た日本学の現状

(1) 大学

1989年夏学期の時点で、日本学もしくは日本語の講座を持っているドイツ語圏の大学は表1のごとく20の大学で、その後もブレーメン大学、デュイスブルグ大学、ライプツィヒ大学、ミュンスター大学で新たに日本学の講座が開設されている。

学生数は1984年夏学期に日本学を主専攻した学生総数が645人、副専攻の学生総数が653人、合わせて1298人、また、1989年夏学期に主専攻した学生総数が1940人、副専攻の学生総数が1710人、合わせて3650人で、それぞれの5年間の増加率は200%、162%、181%であった。中でもボーフム大学、ボン大学東洋学ゼミ、ウイーン大学、ミュンヘン大学、ボン大学日本学ゼミの学生の増加は著しく、それぞれ5年間で390%、315%、285%、219%、209%増えている。

日本学の学生が1984年時点で1番多かったのはボーフム大学で、日本学学生全体の11.3%を占め、ついでベルリン自由大学、ウイーン大学、ボン大学日本学ゼミ、フランクフルト大学に多かった。それが、1989年になると、ボーフム大学の割合は14.2%に増え、ついでウイーン大学、ベルリン自由大学、ミュンヘン大学、ボン大学の両ゼミの順となり、学生の特定大学集中化傾向が更に進んだ。

各大学の1984年から1989年までの日本学の講義内容を示しているのが表2で、これによると、文学がもっとも多く12大学でとりあげられ、ついで歴史学(10大学)、言語学(9大学)、政治学(7大学)、社会学(6大学)、経済学(6大学)の順

になっている⁹⁾。

日本学もしくは日本語の講座を専攻する学生は増えたが、これは他の学科でも言えることだが、修了者は10~12%とそれほど増えていない。日本学を専攻する学生の動機は、他の学科の場合と異なり、一般的な職業上の動機等からではなく、個人的関心からというのが多い。しかし、最近では、他の社会科学を専攻していて、地域として日本に興味を持ち、日本学を副専攻の形で取る学生も増えている。よく知らないで、とびこんでくる学生もいて、熱がさめれば、去るケースも多い。1989年度、大学間の交換等で日本に留学した日本学専攻の学生は全体で144人で、全学生の3.9%であった。修了者の職業としては、研究者、教師、司書、通訳、ジャーナリスト、銀行員、マネージャー等となっている。

1989年度の日本学のスタッフは総数が1235人、中31人が教授、その他、34人の客員教授がいた。1番多いのが、ボーフム大学の14人(教授4人)、ベルリシフンボルト大学(2人)、ハンブルグ大学(2人)、ウイーン大学(1人)がそれぞれ11人であった。

1984年から1989年迄の日本学の研究者の専門の内訳を見ると、文学が1番多く31人、ついで歴史(22人)、思想史(21人)、言語学(20人)、宗教学(14人)、社会学(10人)、経済学(10人)、演劇学(6人)、民族学(6人)、法学(5人)、哲学(4人)、政治学(4人)、芸術学(3人)、音楽(2人)、地理学(1人)となっている。

日本学研究者に対する助成を行う団体としては、ドイツ学術交流協会(DAAD)、ドイツ研究協会(DFG)、ハイゼンベルグ財団、日本の国際交流基金、文部省、ド

イツ日本研究所、フォルクスワーゲン財団その他があるが、近年はトヨタ財団や鹿島財団等日本の民間財団の助成も増える傾向にある。

(2) 学会及び研究団体

日本学者間の情報交換はこれまでは不十分で、それぞれ他の大学の研究者が何を研究しているかわからないような状態であったが、最近になって、かなり改善された。ごく最近まで、日本学の学会としては、3年に1度開かれる「ドイツ日本学者会議」(Deutschen Japanologentage)が唯一の重要な学会であったが、1988年には、東京で、OAGにより、「OAGの日本学者会議」(Japanologentage der OAG)が開催され、ドイツでも、「ドイツ東洋協会 (Deutschen Morgenländischen Gesellschaft = DMG)」や「ドイツアジア協会 (DGA)」による会議が開かれた。

しかし、最近の日本学の成果を見る上で見過ごしてはならないのは、次の3団体の活動である。一つは、1969年にケルンに設立され、1973年以降、国際交流基金によって運営されているケルン日本文化会館で、日独の研究者の交流支援や日本語講座、展覧会やシンポジウム開催等の活動により、幅広い文化面での日独交流を進めてきた^⑩。同会館は、特に最近のドイツにおける日本研究者および日本語学習者の増加に対処するため1988年から毎年、研究者および教師の会議を行っている。二つ目は、1988年に東京にドイツ連邦共和国の政府設立の財団として設立されたシーボルト財団=ドイツ日本研究所で、その目的は「現代日本の文化と社会および日独交流史の研究を通じて日独

両国の相互理解を深め、その学術研究の成果によってドイツ国内における日本研究の水準を高めるうに寄与し、次世代の有為な研究者を育成する」ことである。以後、同研究所は日本学者への研究助成、資料の整備、シンポジウムの開催、年報その他の刊行等、多彩な活動を行っている。三つ目は、ベルリンに1987年に設立された財団ベルリン日独センターである。同センターの目的は「学術、文化および経済生活と関連した分野において、日独および国際間の協力を支援し深める」ことにあり、目的にそった様々なシンポジウムや会合が持たれている。なお、同センターはベルリンの旧日本国大使館を修復して業務を行っていたが、ドイツ統一に伴って首都をベルリンとすることが決まったので、将来はここにボンの日本大使館が移転してくるのに伴い、他所へ移転する見込みである。

先にあげたいいわゆる日本学の学会以外に、最近では社会科学の分野での交流も盛んになっている。日本学研究者と社会学者の橋渡しを企図した「社会科学に立つ日本研究協会」(Vereinigung für Sozialwissenschaftliche Japan-Forschung)が設立されたほか、1989年には日独の社会学者の協力を企図する「日独社会科学学会」(Deutsch-Japanische Gesellschaft für Sozialwissenschaften)が設立され、また、1990年5月にはチュービンゲンで法学者クヌート・ヴォルフガング・ネール (Knut Wolfgang Nörr) とバーデン・ヴュルテンブルグ州政府の主唱で、「ドイツ-東アジア学術フォーラム」が開かれた。

5. 問題点

ドイツでは"Japanologie"「日本学」は,"Japan - Studien"や"Japan - Forschung"「日本研究」とは区別され、「日本学」は伝統的に人文分野の文献学的研究が中心であった。ところが、急増する日本学や日本語講座の学生の大半は、日本に対する社会科学の関心や実用的関心から受講している。

こういった状況に伴い、様々な問題が生じている。教育面では、学生の関心に応えられるような講座やスタッフの不足、語学偏重のカリキュラム、日本語教授法及び教材の不足があり、研究面では、これまでの日本学の閉鎖的体質、学会を始め情報交換の場の不足、資料不足等が問題となっている。

そして何より、今、改めて,"Japanologie"とは何かが問われている。この点を、クラフト教授は次のように述べている。

「日本学は多様な日本研究の中で日本を包括的に研究し統合する中心をなす。それは、日本学がより学問的眞実に迫っているからではなく、その他の日本研究では不可能な包括的やり方で対象に迫っているからである。そこには組織的観点が厳然と存在し、その他の場合は、多数の比較対象の一つにすぎない。

日本学の最小要件をなすのは、その特殊性即ち日本語の文字と言葉の包括的知識で、それは、日本文化を確実に知覚する認識能力を養うための前提条件である。

日本学研究者、日本学以外の日本研究者、日本人研究者、方法や比較に関心のある隣接分野の研究者の間の意志の疎通こそが、効果的日本研究の前提である。

日本学の研究内容はかなり多彩となっ

ている。望まれるのは、アンバランスが目に見えて意味を失い、例えば社会科学の萌芽が日本学の特殊性を放棄することなく強力に育つことである。こういった最小要件を放棄した日本研究は、もしかすると、それぞれの学問分野には正当な場所があるかもしれないが、日本学の枠内にはない。

いずれにしろ、問題は、これまでの人文科学中心の日本学に社会科学的研究をどうとりこんでいくかということと、日本語という特殊言語の教授法と教材の確立、スタッフの養成のように思える。

6. 日本関係資料

(1) ドイツ語資料の書誌

日本に関するドイツ語文献目録としては、最近、まず、ドイツ日本研究所のアダミとプルスによって、日本学の入門書誌 (Einführung in die Hilfsmittel der Japanologie)^④が刊行され、また、同じドイツ日本研究所のエルシュレーガーとシュタルフによって、これはドイツ語の書誌のみではないが、日本関係の欧文書誌目録 (Japanbezogene Bibliographien in europäischen Sprachen)^④が刊行された。

これまでは、ドイツ語単独の日本関係書誌はなく、欧文の日本関係書誌の中に含まれていた。ドイツ語文献の含まれている日本に関する総合書誌としては、時代別に次の目録があった。

- 1542—1853 Bibliographischer alt Japan Katalog. Bearb. u. hrsg. vom Japaninstitut in Berlin u. vom Deutschen Forschungsinstitut in Kyoto. Kyoto 1940. Rep. München 1977

当館図書請求記号 <GB1—29>

ベルリン日本研究所と京都ドイツ文化研究所の共同で作成された欧文の日本関係文献目録。1940年当時のドイツ国内の図書館及び日本国内の18の図書館の所蔵記録あり。

- 1859—1906 Bibliography of the Japanese Empire. Wenckstern, Friedrich von 1. 1859-1893. 2. 1894-1906. Leiden, Tokyo 1895-1907. Rep. Stuttgart 1970. <GB1—10>

- 1906—1935 Bibliographie von Japan Nachod, Oscar (5u. 6:Hanspraesent u. Wolf Haenisch) Bd. 1-6 Leipzig 1928-1940. Rep. Stuttgart 1970.

<GB1—12>

欧文の日本関係図書、雑誌、論文目録。しかし、最近になって、ドイツ語で書かれた日本関係資料のみの書誌を作成する動きが出ている。1989年、まず、ウィーン大学のフォルマネク (Susanne Formanek) とゲトロイアー (Peter Getreuer) が

Verzeichnis des deutschsprachigen Japanschriftums, 1980-1987 Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften. 1989. 194p. <GB1—A27>

を出した。これは、純粋自然科学を除く日本関係のドイツ語文献を雑誌論文を含めて収録してある。これはデータベースに入力され、以後も刊行の予定である。

また、1990年には、ベルリン国立図書館のハダミツキョ (Wolfgang Hadamitzky) が、長い準備の末、初期から現代までの日本関係のドイツ語文献の総合目録 (Japan-Bibliografie)^⑩の刊行を開始した。刊行計画によると、第1巻は1477年

から1920年、第2巻は1921年から1950年、第3巻は1951年から1985年に刊行された日本関係資料の書誌目録で、それぞれがモノグラフ、雑誌、地図のシリーズAと論文のシリーズBに分けて1996年までに刊行の予定である。これもデータベースに入力してあるが、既存のデータベースでは間に合わず、独自のデータベース作成に手間取ったが、以後の作業は早いだろうと述べている。なお、この目録には、ドイツ国内の図書館以外に英仏の国立図書館及び日本の図書館、アメリカ、カナダの図書館の所蔵記録が載っている。

また、1987年に、日本語からドイツ語に翻訳された件数は30点、その中、文学書は18点であった^⑩。文学書に限っては、最近、1868年から1987年までに、日本語からドイツ語に翻訳された667点を収録した近代日本文学独訳目録 (Moderne japanische Literatur in deutscher Übersetzung)^⑩が刊行されている。

(2) 日本関係資料の所蔵状況

日本語学習者、日本研究者の増加は著しいが、ドイツ語圏における日本研究機関の日本語資料を含めた日本関係資料の所蔵状況は、どうであろうか。「ドイツ語圏の大学の日本学」によれば、一般的に不備で、まあましなのは、ボーフム大学 (約5万冊)、ボン大学 (日本学ゼミ—約4万冊、東洋学ゼミ—約9600冊)、ウィーン大学 (約4万冊)、ハンブルグ大学 (約3万1000冊) くらいである。ベルリンは自由大学が約1万9000冊、フンボルト大学が約1万冊所蔵しているが、ベルリン国立図書館 (Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz) に約8万冊の日本語資料を所蔵^⑩しているので、不

備がカバーされている。また、ミュンヘン大学も蔵書は約1万7000冊であるが、これもバイエルン州立図書館 (Bayerischen Staatsbibliothek) の約6万6500冊の日本語資料^⑨によってカバーされている。

なお、日本語資料に関しては、ドイツ語圏に限らず、ヨーロッパ全域で、ユニオンカタログを作ろうとする動き^⑩があり、既にイギリスで日本の学術情報センターと協力したパイロットプロジェクト^⑪が開始されている。

注

- ①渡辺兼庸「フランクフルト「日本年」"JAPAN:A HISTORY IN BOOKS"に参加して」『国立国会図書館月報』359号 (1991. 2)
- ②ドイツー日本研究所編『ケンペル展 ドイツ人の見た元禄時代』ドイツー日本研究所 1990 165p <GB17-E8>
- ③ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料御雇外国人』小学館 1975 524p (GB421-80)によると、明治初年より同22年までの官雇の御雇ドイツ人は175人。
- ④内容については、次の索引が出ている。
Sachregister zu den "Mitteilungen" und "Supplementbänden":1873-1968. Tokyo: OAG, 1968. 57p. <GB1-A16>
- ⑤鈴木直「西ドイツにおける日本語教育」『ドイツ研究』10号
- ⑥Japanese Studies in Europe, Japan Foundation, 1985. 427p <GB63-108>
- ⑦国際交流基金編『ヨーロッパにおける日本研究』国際交流基金 1987 148p <GB63-E3>
- ⑧Kracht, Kraus: Japanologie an deutschsprachigen Universitäten, Wiesbaden: O. Harrassowitz, 1990. 256p. <GB18-A4>

- ⑨ドイツ東洋学協会 (Deutsche Gesellschaft für Asienkunde) の雑誌 "Asien" には、各大学の学期毎の東洋学関係の講義、シンポジウム、資料が紹介される。当館には、14号 (1985. 1) 以降、所蔵 <Z51-N444>
- ⑩ブルーノ・レヴィン「ケルン日本文化会館と西ドイツにおける日本学研究」『ケルン日本文化会館二十年史』ケルン 日本文化会館 1989 155p <UA81-E69>
- ⑪Adami, Norbert R. & Plus-Dietrich, Dörte: Einführung in die Hilfsmittel der Japanologie, München: Indicum, 1990. 89p. <GB1-A23>
- ⑫Ölschleger, Hans Dieter & Stalpl, Jürgen: Japanbezogene Bibliographien in europäischen Sprachen, München: Indicum, 1990, 296p. <GB1-A22>
- ⑬Hadamitzky, Wolfgang & Kocks, Marianne: Japan: Japan-Bibliographie München: Saur, 1990-6v. <GB1-A24>
- ⑭Buch und Buchhandel in Zahlen, 1988 <Z65-A116>
- ⑮Ogasa, Gisela & Puls, Dörte & Stalpl, Jürgen: Moderne japanische Literatur in deutscher Übersetzung: eine Bibliographie der Jahre 1868-1987, Hamburg: Helmut Buske Verlag, 1988. 123p <UP63-A6>
- ⑯Krempien, Rainer (Hrsg.): Staatsbibliothek Preußischer Kultur Besitz Berlin. Katalog der Ostasienabteilung, 19Bde., Osnabrück 1983-85. <GE1-71> による
- ⑰Jahrbuch der Bayerische Staatsbibliothek 1989 <Z65-A402> による
- ⑱嶋田邦彦「ヨーロッパの日本情報専門家たち」『国立国会図書館月報』360号 (1991. 3)
- ⑲大野公男「英国の大学図書館による NAC-SIS-CAT の試用」『学術情報センターニュース』13号 (1990.10)

表1：日本学専攻および副専攻を合わせた学生数（1984/1989）

		1984年夏学期		1989年夏学期	
		専攻	総計	専攻	総計
ベルリン自由大学	①	71	165	222	394
ベルリンフンボルト大学	②	35	35	17	17
ボーフム大学	③	73	113	276	554
ボン大学（日本学ゼミ）	④	60	105	185	325
ボン大学（東洋学ゼミ）	⑤	44	73	175	303
デュッセルドルフ大学	⑥			0	126
エアランゲン大学	⑦	0	70	0	120
フランクフルト大学	⑧	54	100	84	111
フライブルク大学	⑨	35	70		
ゲッティンゲン大学	⑩	23	60	36	85
ハンブルグ大学	⑪	45	75	123	195
ハイデルベルグ大学	⑫			97	156
ケルン大学	⑬	27	65	27	113
マールブルグ大学	⑭	17	41	49	70
ミュンヘン大学	⑮	40	105	218	335
トリアー大学	⑯			55	92
チュービンゲン大学	⑰	37	67	99	133
ウイーン大学	⑱	65	91	230	351
ヴェルツブルグ大学	⑲			7	95
チューリッヒ大学	⑳	19	63	40	75
総計		645	1298	1940	3650

出典：「ドイツ語圏の大学の日本学」

表2：1984年から1989年までの日本学講座の講義内容

	※①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑳	計
人類学				○															1
民族学				○														○	2
精神学																○			1
歴史学		○	○	○		○	○			○			○	○			○	○	10
文化史																○			1
芸術史										○			○					○	3
文学		○	○				○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	12
メディア学				○															1
音楽																○			1
哲学		○					○			○		○			○				5
政治学		○	○	○		○				○		○	○	○					7
法学														○	○				2
宗教学							○			○		○	○	○				○	6
社会史				○															1
社会科学		○																	1
社会学		○			○		○						○	○				○	6
言語学		○	○		○			○	○	○			○		○			○	9
演劇学				○					○				○					○	4
経済史				○										○					2
経済学		○	○	○	○					○				○					6
計		4	6	5	9	1	3	4	2	3	8	1	6	8	6	2	4	3	6

出典：「ドイツ語圏の大学の日本学」

※ 数字は表1の大学に対応

(たかぎ・ひろこ 参考課)